

# 京都部落問題 研究資料センター通信

第63号

発行日 2021年4月25日（年4回発行）

編集・発行 京都部落問題研究資料センター

## 2021年度 差別の歴史を考える連続講座

第1回 6月11日（金） 戦後バラックと京都

講師：本岡 拓哉さん（同志社大学人文科学研究専任研究員（助教））

バラック居住の消長に焦点を当てることで、戦後京都の都市形成や住宅問題を考察します。

第2回 10月1日（金） 銭座跡村の成立—18世紀京都の市街地近郊にできた皮革業の村—

講師：小林 ひろみさん（奈良県立図書情報館公文書課会計年度任用職員）

近世の京都の被差別民の村で最大級の人口を擁することになるこの村の成立について、近年公開された「今村家文書」などから新たに解明できたことをご報告します。

第3回 10月15日（金） 大塩平八郎と被差別民社会—大坂四ヶ所と渡辺村—

講師：藪田 貫さん（関西大学名誉教授・大塩事件研究会会長）

大塩平八郎は、「救民」の旗の下、門人と決起した「大塩の乱」の指導者として知られています。町奉行所与力でもあった大塩と被差別民社会との関係についてお話しします。

第4回 10月22日（金） 光州学生運動と京都・両洋中学の朝鮮人学生

講師：堀内 稔さん（むくげの会会員）

1929年の光州学生運動とは朝鮮の学生が主体となった抗日運動で、多くの学生が退学処分されました。これらの学生を受け入れた京都の両洋中学についてお話しします。

第5回 10月29日（金） 滋賀の戦後部落史—『滋賀の同和事業史』の成果を踏まえて—

講師：井岡 康時さん（奈良大学文学部史学科教授）

第二次大戦後の滋賀県を舞台に、地域の歴史的特性に根ざした部落史像の再現を試みます。

第6回 未定

◇時間：午後6時30分～午後8時30分 ◇参加費：無料

◇場所：京都府部落解放センター4階ホール

◇参加ご希望の方は連絡先を明記の上、前日までにFAX・電子メールでご連絡ください

# 食肉文化と犬

吉村智博

(大阪国立大学都市研究プラザ特別研究員)

歴史的には、「犬追物」の的となったかと思うと、「犬公方」による生類憐みの令の対象のひとつとして愛護・庇護されることさえあった「犬」（犬保護の事例はわずかだが）。かつて神人に準ずる下級神官のことを「犬神人」とよび、いまでも高野槇よりも質がやや劣り役に立たない品種を「犬槇」と称している。世俗的には、「権力の犬」「犬畜生」などと蔑視をともなつて負のイメージを刻印されてきている。西欧の宗教画の事例をもち出すまでもなく、今さらながら犬はそれほど人に身近な生き物ということになるが...

ところで、以前から食肉文化の歴史について調べている折に気になっていたのが、この「犬」である。食肉文化にまつわるいくつかの絵画や文献の挿絵の類に、犬が登場する場面がよくある。まずは、下の図をご覧いただきたい。いずれも一九世紀に書かれたもので、時代としては江戸から明治にかけてであるが、広重とビゴの作品

が単独の絵画、その他が書物の挿絵である。その描かれ方は、一見しての通りで、痩せ細って慌てて逃げていく様子だったり、物欲しげに人を見上げていたり、果ては残飯をもらう仕草だったり、何とも切ない情景なのである（イソップ寓話で、橋を渡る犬が川面に映った自身の姿を別の犬と見紛い、獲物の肉を落としてしまうというエピソードは著名）。

社会学者アロン・スキヤブランドは、『犬の帝国―幕末ニッポンから現代まで』（本橋哲也訳、岩波書店、二〇〇九年）のなかで、歴史学者キャスリーン・キートの「政治的文化的偏見が犬に投影されている」という指摘を援用して、「人は犬を語るときに、自らの時代と自分自身、そして他者について語っている。人間と犬の関わり、人間が犬をどう考えてきたかを歴史的に考察することは、人々と犬との関係に光を当てるだけでなく、過去と現在の人間同士の関係にも新しい視角をひらく」と論じた。スキヤブランドはまた同書で、

田中内記『大阪新繁昌詩』1875



松原岩五郎『最暗黒の東京』1893



下等社会の食物店



安藤広重「山くじら」『名所江戸百景』1858



J・ビゴ「牛肉屋」『あさ』1885



動物学者ジェームズ・サーベルの研究に基づいて、①情動的にも象徴的な意味で近い、人間として取り扱われる要求が強い、②境界を越えるものであり、かつそれを曖昧にしよう、③人間相互の関わりを媒介として果たす役割が大きい、といった三点を犬の社会的動物としての特徴であると指摘した。その上で「主人と従者との非対称的な関係は飼い主とペットとの交流の論理を形成するが、それはまた植民者と被植民者、政府の役人と大衆、教師と生徒、富めるものと貧しき者、親と子どもとの関係でもある〔中略〕近代の権力者たちが野良犬や、一度は飼いならされたながら野生化した犬や野犬を嫌う」とも述べた。

こうした犬と政治文化との関係がまさに食肉文化を語る際にも適用されたとみてよいであろう。すなわち、江戸時代には「葉喰い」「山鯨」などと偽称して秘密裏におこなわれていた食肉文化は、近代以降では「官許」のもとで公然化するようになったが、正規の牛肉店への高い評価とは裏腹に露店へのあからさまな低い評価も目立つようになっていく。服部撫松『東京新繁昌記』（一八七四年）の「屠場の糜肉」「犬馬の肉」といっ

た表現、松原岩五郎『最暗黒の東京』（一八九三年）の「腥臭鼻辺に近づくべからず」「調理法の不潔なる」といった言い回し、福沢諭吉『福翁自伝』（一八九九年）の「何処から取寄せた肉だか、殺した牛やら病死した牛やらそんな事には頓着なし」「牛は随分硬くて臭かつた」などの述懐はその代表格である。密食や下層社会で広くおこなわれていた露店での肉食（ホルモンなど内臓も含む）への露骨な蔑視が「哀れな犬」の姿として描写されることになったと推察される。紹介した図版では、密食慣行「山くじら」への睥睨↓食肉露店「牛肉」の不衛生観↓下層社会での食文化（臙肉）への蔑視といった時代状況となるうか。

大野淳一『イヌはどこから来たか―犬の歴史と発達』（誠文堂新光社、一九八四年）、塚本学『江戸時代の人と動物』（日本エディタースクール出版部、一九九五年）、谷口研語『犬の日本史―人間とともに歩んだ一万年の物語（読みなおす日本史）』（PHP新書、二〇〇〇年）、大石高典・近藤社秋・池田光穂編『犬からみた人類史』（勉誠出版、二〇一九年）などによると、平安時代から日本で飼育されてきた最も人間との付き合いが長い犬種は、

チベット原産の「狎」で、新羅など朝鮮半島を経由して日本に輸入されてきたのだという。ただ、絵巻物などを分析すると、雑種・交配化はすでに一二世紀頃から進んでおり、江戸時代には「狩犬」と「町犬」の双方が居たようで、町犬は、猟犬と中国やインド由来の犬種が交配した結果、雑種として誕生したものだと思われる。

「地犬」「和犬」などと称されていたのが、その犬種であつたらしく、かのイサベラ・バードも一七八年の踏査記録『日本奥地紀行』で「原始的な日本の犬」は「クリーム色のオオカミのような外見をした動物」だと、その特徴を捉えている。一方「狎」はというと、愛玩性が高かつたためか、幕末にはアメリカのペリー提督への土産に公儀から四匹も献上されたらしい。志村真幸『日本犬の誕生―純血と選別の日本近代史』（勉誠出版、二〇一七年）は、近代以降の犬と社会の関係の歴史を詳細に分析した高著である。同書によると、大量の西洋犬（とくにポインターやセッターなど猟犬）が輸入され、雑種化が進み、一八七一年に制定された畜犬規則によって畜犬税を払わなかったり、鑑札の給付を受けられなかった犬はすべて「屠狗児」に撲殺された。

一九〇一年に内田魯庵が『社会百面相』で「犬物語」を書いたころ、巷では、俄かに「日本犬」危機説が唱えられるようになっていき、これに触発された斎藤弘は、日本犬保存会を一九二八年に立ち上げる。これによって、「日本犬」の呼称が世間に定着し、犬の分類概念のなかに「血統」論が持ち込まれるようになった。「野犬」としてデインゴやドールが、「畜犬」として銃猟犬、鳥猟犬、番犬（「日本犬」）、愛玩犬などがそれぞれ認識され始めるのもこの時期である。ただし、このとき、山形・福島両県に生息していた高安犬は熊猟などで活躍していたものの、「優物」「逸物」「名犬」ではないといった理由で「日本犬」から除外された。また、平岩米吉と南方熊楠による犬の祖先に関するジャッカル説とニホンオオカミ説とが対立していた。一九三〇年代になると、天然記念物として七種（のち、絶滅六種）が相次いで指定されるようになり、大型犬として、マタギ犬を祖先とし猟犬・闘犬に活躍した「大館犬（秋田犬）」が一九三二年に指定されたことで（すでに二七年に秋田犬保存会が発足）、「日本犬」を代表する犬種が成立したようである。その後、中型犬として、「土佐犬（四国

犬、土佐闘犬とは別)」「甲斐犬」「紀州犬」「越の犬(福井・石川・富山・新潟の四県、七一年絶滅)」がそれぞれ一九三四年に、「北海道犬」が一九三七年に、小型犬として、「柴犬(美濃・越後・山陰などを冠するものの)」が一九三六年にそれぞれ指定された。柳田国男が『明治大正史―世相編』で「家に属する動物」を論じたのは一九三一年のことであった。

しかし、総力戦体制のもとで発足した帝国軍用犬協会は、軍用犬として、シエパード、ドーベルマン、エアードル・テリアの三種を重宝したため、「日本犬」の軍用犬としての限界が明らかになっていく。伝令送致できないなどの問題が早期に指摘され、食料配給制などによる犬餌の不足が追い打ちをかけ、やがて、「日本犬」も含まれた多くの犬は、犬毛への活用という、文明開化期の洋犬ブーム以来の受難の時期を迎えることになる(今川勲『犬の現代史』現代書館、一九九六年を参照)。

食肉の場面に登場する切なげな仕草の犬は、蔑視されてきた下層社会の人々の食肉文化の実像を、時代に翻弄され続けてきた自らの姿に重ねあわせて、私たちに伝えているのかもしれない。

## 本の紹介

松下 佳弘著

### 『朝鮮人学校の子どもたち 戦後在日朝鮮人教育行政の展開』

伊藤悦子

(京都教育大学)

#### はじめに

教員養成系大学に勤めていると目の前の教育課題に対する処方箋が求められ、最近は「子どもの貧困」や「日本語指導が必要な子どもたち」に関わる報告書ばかり読んだり書いたりしてきた筆者にとつて、久々に腰を据えて読ませていただいた著作である。著者の松下さんは「全国在日朝鮮人教育研究協議会」の京都大会の実行委員会で一緒にしたりした知人であるが、ここ最近、松下さんは論文執筆三昧と風の便りに聞いていて、その成果がこの本であると合点した。

本書は松下さんが京都市教育委員会退職後、京都大学の修士課程に入学し一〇年の月日を費やして完成させ、二〇一八年に提出した博士論文に加筆修正したものである。

博士論文を元に行っていること、もともと非常に冷静沈着だったお

人柄であるためか、本書では掘り起こした事実を元に一貫して緻密な論が展開されている。ただし、

緻密であるがきわめて読みやすい。そのうえ、文章で表現するには煩雑になりがちな行政システム、あるいは関わる人々の略歴などについては適切に図表化されており、また、章ごとに「小括」が設定されていることもあり、読者への気配りが微に入り細に入り施されている良書である。本書の最後にある資料編や朝鮮人学校の全体像を示した表、文献目録の構成、索引のつくり方、ひいては章の扉に配置された資料の写真にいたるまで、本の出来栄として久々に良書にめぐりあえたと唸ってしまった。では、その内容についてまずは紹介していきたい。

#### 一 本書の問題意識

本書は戦後(在日朝鮮人にとって『解放後』)の一九四五年から一九五〇年代前半ぐらいまでの約一〇年間における在日朝鮮人の教育要求に対して、GHQ・日本政府及び地方自治体がどのように対応したかを第一次資料に基づいて明らかにすることを目的にしている。在日朝鮮人教育に関わる政策ではなく行政的対応に着目した研究である。その際に「住民である朝鮮人」への対応を迫られた地方自治体の動向に着目し、中央と地方との緊張関係や地方独自の判断のありようを子細に追及することになる。

この分野においては小沢有作『在日朝鮮人教育論 歴史編』(一九七三)が金字塔のように建てっており、在日朝鮮人が求める民族教育と日本政府が戦前から継続していた同化教育とのせめぎ合いについては既に明らかになっている。これに対して本書は、①イデオロギーとしての同化教育の内実の実態的把握(中央と地方との極端)、②民族学校閉鎖の後に設置された公立学校における朝鮮人教育の内容及課題を明らかにするとともに、それを通して③戦後教育の「民主化」

が持つている「国民主義的な限界」を検討することに問題を設定している。

すなわち、小沢有作が民族教育と同化教育という二項対立で描いた図式のなかに、在日朝鮮人にとっては教育の自主性を担保しつつも公費支出を求めたいという要求が絡んでいたこと、それに対して行政側も「住民としての朝鮮人」に対して自主性への譲歩と教育要求への対応という現実的問題があったことを明らかにすることが本書の課題であると筆者は理解した。

## 二 概要

本書は二部構成になっており、第一部は「朝鮮人教育に対する行政措置とその執行」で第二部は「一九五〇年代前半における公立学校の朝鮮人教育」である。第一部では中央・地方行政による朝鮮人学校閉鎖措置について一九四九年までの政策及び行政的対応が叙述されている。第二部は朝鮮人学校閉鎖後、公立学校に「転校」せざるをえなくなった在日朝鮮人の子どもたちをいかに「公立学校」で引き受けたかを描いている。目次の概略は以下のとおりである。

### 第一部 朝鮮人教育に対する行政措置とその執行

- 第一章 朝鮮人教育施設の開設と行政当局の対応 一九四五年九月～四七年十二月
- 第二章 学校に対する行政措置の枠組みと執行 一九四八年一月～四九年三月
- 第三章 教育費の公費支出をめぐる攻防 一九四九年四月～九月
- 第四章 朝鮮人学校閉鎖措置の法的枠組み 一九四九年一月～一月
- 第五章 学校閉鎖措置の執行 一九四九年一月～二月
- 第二部 一九五〇年代前半における公立学校の朝鮮人教育
- 第六章 公立朝鮮人学校・分校の開設 東京都・兵庫県
- 第六章補論 四府県における公立朝鮮人分校開設の経緯
- 第七章 愛知県における朝鮮人学校の「完全閉鎖」をめぐる攻防
- 第八章 京都府における公立小学校「朝鮮学級」の開設と朝鮮中学の設置認可
- 終章

### 三 第一部の展開

第一部の叙述は在日朝鮮人の教育施設に対する日本政府の対応の変化を年代別に追い、具体的な行政の状況を京都府・京都市を事例として明らかにしている。章ごとにその内容を紹介したい。

第一章は端的である。戦後直後、朝鮮人は自らの教育施設を建設したが、それに対して日本政府は当初あいまいな対応をしていた。そして一九四六年には在日朝鮮人は「日本国籍者」であり、子どもたちには「就学義務」があることを表明するに至る。ただ、朝鮮人による私立学校には反対もしていない。そうした方針の曖昧さは府県によって異なる対応となって表れ、京都府・京都市には四一の朝鮮人教育施設がある一方、広島県の場合は県軍政部が無認可状態の朝鮮人教育施設の取締を県に要請している。これに対して県は各種学校として認可する処置をとってしのいでいる。

あつた時期を叙述している。この時期は朝鮮人教育への統制が強化されていく時期とされてきた。それに対して本書は、朝鮮人学校と地方行政が交渉し、地域に即した私立小学校や各種学校として学校を継続させていったことを明らかにしている。

一九四八年文部省は「朝鮮人児童の就学義務」と「朝鮮人学校の各種学校の設置を認めない」ことを内容とする通達（一・二四通達「朝鮮人設立学校の取り扱いについて」）をすするとともに、GHQの圧力のもと、朝鮮人学校教職員の教職適格検査を実施せよと文部省は地方に通達した。この二政令の施行過程が第二章で詳細に分析されているのである。

そもそも在日朝鮮人側は学校認可などを強要する上で学校教育法に取り込み、本来は「超国家主義・超軍国主義者」を排除するためになされていた教職適格審査を在日朝鮮人教師にも適用し、行政命令が国一地方に貫徹される仕組みが作られていく。それを踏まえての朝鮮人学校閉鎖命令であり、その後朝鮮人が屈辱的と位置付けてい

る「五・五覚書」によって民族学校閉鎖が実施されたのである。

この経過については先行研究にも記されているが、本書ではその実施過程を京都府・京都市を事例に緻密に実証していることが愁眉である。教職員適格審査の状況も『京都府公報』やGHQのSCAP文書から人名を同定したうえで表に示されている。こうした実証を経て、フルタイムの朝鮮人学校が少数ながら残る一方、公立学校内に朝鮮人教師による独自の教育を開始する可能性も残ったことを指摘している。

第三章では短期間ではあるが朝鮮人の「国庫負担請願運動」と京都市の公立学校内の朝鮮人「特別学級」への公費支出が論じられている。そもそも教育費問題は「援助と統制」の問題であり、この時期は「ノーサポート、ノーコントロール」が私立学校一般に対しても適用されていた。しかし、一九四九年の私立学校法施行に伴い公費援助が始まる。在日朝鮮人もその状況のなかで請願運動を行い、一時は内閣において公費支出の方向に動いたものの結局必要なしと政治決着することになる。背後に

GHQの指示があったことを明らかにしている。

さらに第四章では一九四九年にだされた「朝鮮人学校処置方針」という閣議決定により、全国三六〇校を警察権力も用いて一斉に閉鎖することになった顛末を描いている。戦後設立された朝連（在日本朝鮮人連盟）が「団体等規正令」によって解散させられ、「解散団体の財産の管理及び処分等に関する政令」で学校が処分されることになった。当時の朝鮮人運動の大弾圧であるが、その執行過程においてきわめて強引な法解釈がなされていたことを学校設置認可制度の側面と学校教職員に対する教職適格審査の状況を京都府と滋賀県の事例で検討したものである。

朝連が関係している学校法人では許可が下りないことから新たな法人申請をした朝鮮人側の努力は水泡に帰し、学校法人の申請はことごとく不許可になっている。また、教職適格審査状況についても「占領政策の反対者」が適用され朝鮮人教員が不適格とされた。いわば「白を黒」にする強引な法解釈や行政的措置がなされていたことが子細に明らかにされている。

ただ、第四章は「閉鎖措置をめぐる『合法性』の質ともいうべき問題を批判的に考察することを目指しているが、政治的判断で朝鮮人学校が閉鎖されたという小沢有作の指摘を覆すものではない。

強引な法解釈を経て、朝鮮人学校が閉鎖されていくのであるが、第五章では実は二大政令によって接収された学校は六三校で学校教育法に基づく接収が二〇九校であったことと、京都府・大阪府における執行過程について各種地方行政文書から明らかにしている。さらには朝鮮人学校の閉鎖をした直後に私立学校法が成立していることから、「自主性と公共性の並立を含意した私立学校法の制定において、朝鮮人学校問題が重要な位置を占めていたことを示唆している」と指摘している。

#### 四 第二部の展開

第一部が日本政府の行政的措置について法律に基づく措置であったかどうかを検討しているのに対して、第二部は朝鮮人学校閉鎖後に子どもたちが転校していった公立学校をめぐって地方行政と在日朝鮮人とがどのように交渉したか

を描いていて、具体的状況がわかり興味深い。本の題名である「朝鮮人学校の子どもたち」がいうところの「子どもたち」がようやく出てくる。この第二部を支える重要な資料は外務省外交資料館所蔵の『在本邦諸外国人学校教育関係の朝鮮人学校関係』であるが、それ以外にも各地方の公文書及び教育委員会議事録といった既存資料のみならず、文書公開請求をして入手した資料、あるいは関係者の聞き取りなど、ありとあらゆる資料を駆使して五〇年代前半の公立朝鮮人学校、分校、学級を描いている。史料の渉猟に心血を注いだことがわかる部分である。

したがって、叙述としては事実の発掘に重きがあるので要約はなかなか困難であるが、「公立朝鮮人学校」があった事実は実はそれほど周知されていないので、第二部全体をまとめて紹介したい。

朝鮮人学校が閉鎖されたため、そこで学んでいた子どもたちは日本の小学校に転校することになるが、集住地区がある場合、日本の学校では収容できない問題が生じた。また、在日朝鮮人側にすれば学区をまたいでも「集団で転校」



「何らかの朝鮮語・朝鮮文化の学習」を日本の学校で実施したいという要望があり、各地方において交渉が重ねられている。

小学校の場合、東京都立朝鮮人学校が一二校、兵庫県では公立分校が八校設置される。先行研究では朝鮮人側の民族教育要求と運動は論じられてきたが「行政側の動向や意図は十分に検討されていない」ことから、公立朝鮮人学校設立の日本側の意図を明らかにすることが目指されている。

教育委員会での議論を丁寧に追う中で結論は「自前で教室や設備の確保などの新たな経費を要することなく、かつ地域住民である朝鮮人の側の『集団入学』という要求を満たす」ことができたことから、朝鮮人だけが就学する公立小学校が成立するのである。また、日本人保護者や学校関係者の「朝鮮人迷惑論」が底流になっており、朝鮮人側の教育要求を理解したうえで措置ではないことは明らかだった。ただし、民族学校ではなく、あくまでも日本の学習指導要領に準拠する日本の学校であったが、朝鮮語・朝鮮歴史などを正課として教育することができたので

ある。

そして本書では、これら朝鮮人だけの公立学校・分校がどのような過程を経て閉校されていくのかも追及している。特に愛知県の場合、第七章を割いて論じている。

愛知県の場合、『交渉記録』が行政文書記録として残されており、その分析がなされている。この章は教育行政というより政治史に近い。分校があることの弊害（日本にとつての）が意識され、GHQからの命令もあって完全閉鎖となる。朝連を失った当時の在日朝鮮人にとって運動が困難であるなか、当事者である子どもや保護者が中心になって動いていたことにも着目したい。

最後は京都市立小学校の「朝鮮人課外教育」、とくに市立養正小学校の民族学級について明らかにしている。ちなみに、養正小学校には二〇二一年の現在も「コリアみんぞく教室」が設置されており、内容は当時と異なるが朝鮮人講師による活動がなされているもので、京都市教育委員会の主事をしていた著者が良く知っている実践であるが、種々の資料で詳細に実態が明らかにされている。このような

公立学校での朝鮮語・朝鮮文化の教育が実現できた背景には、公選制教育委員会制度が実施されたことと、学習指導案が「試案」扱いであったことが関係していると指摘している。

これら掘り起こした事実をもとに各地方において朝鮮人対象の独自の教育が実施され、そこに公費が投入されたことを明らかにしている。それは「国の意向と対立あるいは教育法の枠を逸脱したとしても、措置を『平和裏』『穏便』に執行するためには、地域住民である朝鮮人の教育要求を一定程度受け入れることはやむなし」との判断が地方自治体にはあったからである。このような在日をめぐる判断は「自主性を基盤とした公共性と呼ぶに値するもの」であり、「日本における公教育の変革という課題を具体的な形で示したものである」として重要な意味を持つといえる。最後の指摘となっている。

##### 五 本書の意義と私的要望

以上、長い紹介になったが、第二部は事実をして語らしめているので伝えきれないかもしれない。本書は、小沢有作や中島智子

などの先行研究の枠組みをひっくり返すようなものではないと著者が謙虚に語っているように、分析の枠組みを論じているわけではない。ただ、比較的在日朝鮮人側の資料に立って分析されてきた「民族教育運動」が日本の公教育においても部分的にせよ受け入れざるを得なかった理由や経過を日本側行政史料で示した点が本書の重要な点である。しかも、先に述べたように日本側史料が驚くほど緻密に収集され、整理されていることである。おそらく、今後史料的にこの水準を超えることは難しいだろう。

退職後の時間を活かしたと推測するものの、その忍耐力と根性に脱帽せざるを得ない。

肯定的評価ばかりでは書評にならないので、最後に私的要望を記したい。本書が提示した「中央と地方」という枠組みについてはもう少し追及してほしかった。それは現在の在日朝鮮人ひいては定住外国人に対する教育や社会保障にかかわる問題に通じるからである。在日朝鮮人をめぐる諸問題は往々に国家間の争点となり、現在も強引な法解釈や政治的判断で在日の

権利はないがしろにされている。高校無償化も幼稚園無償化も朝鮮学校は除外されている。朝鮮学校に対しては地方自治体が補助金を支出しているが、それも自治体の長による政治判断で覆されること。がしばしばである。教育内容の多様化、リースクールの存在など「教育の自主性」と「公費支出」の関係は今大きく変化している。「民族教育」ではなく「自主性」という枠組みで論を展開してきたのであれば、現在ともう少し切り結ぶ表現があっても良かったかなという印象を持った。

また、本書は「朝鮮人学校の子どもたち」であるので「ないものねだり」になることを承知で私の問題意識から指摘すると、戦後の在日朝鮮人をめぐる教育は「民族教育」「自主性」の問題と、「未就学・不就学」の問題があったはずで、そこを全く考察していないのがちよつと残念である。

最後に蛇足めいた私的要望として二点あげたい。一つは年表があればもつと読みやすかったこと、もう一つは、史料のなかの用語で現在ではふさわしくない言葉には普通「」をつけるが、本書では数か

所「父兄」が無造作に本文で使われていたのが少し気になった。あと、「戦前における在日朝鮮人子弟の教育」の著者は田中勝文である。発見した唯一の誤植。

どちらにせよ、朝鮮人学校の研究書としては比類のない一冊である。大著ではあるが読みやすいので是非読んでみて、各自で目から鱗をはがしていただければと思う。

(六花出版、二〇二〇年一〇月、四〇〇〇円＋税)



特集 同和教育運動と私

**部落問題研究 235** (部落問題研究所刊, 2020.12) : 1, 058円

近世・近代移行期における人の国内移動管理と四国遍路  
中川未来

戦前・戦時体制下の東京における「行き倒れ」の実態—  
「行旅病人」「木賃宿」「浮浪者」に関する調査の検討—  
竹永三男

国連・子どもの権利条約と広報・普及活動の意義—第42  
条(条約の広報義務)の意義と重要性—(下) 三上昭彦  
書評 鬼嶋淳著『戦後日本の地域形成と社会運動—生活・  
医療・政治』 中村元

翻訳 ヴェ・エヌ・ミャーシシエフ著「心理学における  
欲求の問題」 小野隆信

**部落問題研究 236** (部落問題研究所刊, 2021.2) : 1, 163円

特集 人権と教育をめぐる動向と課題

「部落差別の実態に係る調査結果」の検証—「一般国民  
に対する意識調査」を中心に— 梅田修/人権が問われ  
ながら麻痺していく人権の感覚 川辺勉/学校教育の現

状と授業実践における取り組みの重点—社会認識の基礎  
からの育成にむけて— 川本治雄/コロナ禍の教育政策  
と「個別最適な学び」 八木英二

近世の善光寺・周辺地域における移動と行き倒れ・救済  
藤本清二郎

**リベラシオン 180** (福岡県人権研究所刊, 2020.12) :  
1,000円

松源寺日曜学校の研究 関儀久

松本治一郎・井元麟之研究会 資料紹介 松本治一郎旧蔵  
資料(仮)紹介 1—泉野利喜蔵からの書簡— 塚本博和  
川向秀武氏の教育への「問い」とライフストーリー 4—  
埼玉県同和教育研究協議会の立ち上げの中での「出会い」  
を中心に— 板山勝樹  
書評

善野焔著『旅の序章』 平原守/福岡県人権・同和教育  
研究協議会編刊『人権の歴史と歩みに学ぶ—フィールド  
ワーク—』 高松美保子/矢野寛治著『団塊ボーイの東京  
1967—1971』 調福男

民衆史こぼれ話 片隅に生きた人たち 40 「ひえもんとり」  
の周辺 7 石瀧豊美



識字運動の担い手たちが語る 3 “生きるために文字を覚える” 梶川田鶴子さん（住吉輪読会・水曜組） 後編 菅原智恵美

部落解放の思想と部落の情報問題 高橋典男

**ひょうご部落解放 177**（ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2020.9）：900円

特集 『人権政策マップ2019』兵庫県内自治体の同和行政に関するアンケート調査報告書

同和行政推進のための体制 細田勉／部落差別事象の把握（モニタリング事業を含む）と人権に関する条例制定の動きおよび本人通知制度 北川真児／同和教育の現状 坂本研二／隣保館事業の現状 山本崇記／各自治体が実施した人権意識調査の結果と課題 石元清英

柏葉嘉徳師匠との思い出 永瀬康博

本の紹介

谷口真由美・荻上チキ・津田大介・川口泰司著『ネットと差別扇動 フェイク／ヘイト／部落差別』今西雄飛／兵庫県在日外国人入居協会刊『閉じ込められた命 ハンセン病と朝鮮人差別』山本紀子／善野娘著『旅の序章』井上浩義

**部落解放 799**（解放出版社刊, 2021.1）：600円

特集 東京の解放教育 皮革産業とと畜に学ぶ

本の紹介

内田良子『「不登校」「ひきこもり」の子どもが一步を踏みだすとき』大橋由香子

追悼 元NHKディレクター福田雅子さん 川瀬俊治

鳥取ループ「全国部落調査」復刻版裁判の争点 片岡明幸

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

3 今も残る「光田氏反応」の注射痕 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 3

日本国憲法と差別問題の位相 谷元昭信

**部落解放 800**（解放出版社刊, 2021.1）：1,000円

第51回部落解放・人権夏期講座報告書

**部落解放 801**（解放出版社刊, 2021.2）：600円

特集 新潟県における解放教育のいま

本の紹介 石山徳子『「犠牲地域」のアメリカ核開発と先住民族』日野範之

法務省人権擁護局の『部落差別の実態に係る調査結果報告書』を読む 友永健三

追悼 戦後教育学研究に同和教育を位置づけた川向秀武先生 森山沾一, 板山勝樹

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

4 浮浪児に非ざるも浮浪状態に近し 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 4

行政闘争方式の確立と「オール・ロマンス事件」の再考

谷元昭信

**部落解放 802**（解放出版社刊, 2021.2）：1,000円

特集 新型コロナウイルスと差別／マイノリティ

**部落解放 803**（解放出版社刊, 2021.3）：600円

特集 あれから10年 福島の今

本の紹介 藤田正『歌と映像で読み解くブラック・ライヴズ・マター』外川正明

リレーエッセイ 水平社100年に想う 1 待宵の日々 駒井忠之 部落史・部落問題に関する啓発・学習に正確をきすために 『2019年度 史・資料プロジェクト報告集 近代編 増補・改訂版』の活用を 井上法久

もう一つの隔離 ハンセン病療養所附属保育所を生きて

5 大浜女史に養子に誘われて 福岡安則

春告鳥は地を這う 戦後部落解放運動史の検証と再考 5

糾弾闘争・行政闘争の今日的な意義と社会的責任論 谷元昭信

**部落解放研究 214**（部落解放・人権研究所刊, 2021.3）：2,000円

特集1 生政治とマイノリティ

生政治と同和行政・人権行政 友常勉／バイオポリティクスからネクロポリティクスへ—第二次緊急事態宣言とコロナ禍を考える— 中村勝己／都市の再開発と同和地区のジェントリフィケーション政策—新自由主義と部落差別解消推進法情況— 廣岡浄進／人種の隔離—イタリアにおけるロマ・キャンプとスラム— ジョヴァンニ・ピッカー／エリザベッタ・ヴィヴァルディ（翻訳：小美濃彰）／COVID-19がインドのダリトに与えた影響—カーストに基づく暴力と司法へのアクセス— ラフル・シン（翻訳：渡邊啓太）

特集2 朝鮮衡平運動史の研究 4

戦時期・解放後朝鮮における皮革統制と衡平運動関係者の活動 水野直樹／衡平運動史研究の展望・続—『朝鮮衡平運動史料集・続』刊行にあたって— 渡辺俊雄／朝鮮衡平運動史研究日本語文献一覧について 朝鮮衡平運動史研究会

**部落解放研究くまもと 81**（熊本県部落解放研究会刊, 2021.3）

特集 部落解放運動と時世の実像 吉本洋一

ありのままの姿で 松永信子

医者と共に近代医学を切り拓いた人びとに光を〜「解体新書」を導いた「健やかなる老屠」〜 村上秋成 被差別民と〈名君〉—細川重賢『雑事紛冗解』の記述から 矢野治世美

**部落解放ひろしま 103**（部落解放同盟広島県連合会刊, 2021.1）：1,000円

会刊, 2021. 3)

特集 崇仁と皮革の歴史

月刊スティグマ 295 (千葉県人権センター刊, 2021. 2) : 500円

差別とは何か、偏見とは何か その2 福岡安則

地域と人権 1216 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 1. 15) : 147円

全水100周年を迎え、考えること 9 「全国水平社」創立の時代背景—1921年を振り返る 西尾泰広

法務省6条調査の結果について 長田弘行

地域と人権 1217 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 2. 15) : 147円

解同偏向番組放映NHKに抗議

月刊地域と人権 441 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 1)

「部落差別解消推進法」第6条「調査」結果の概要と今日的課題 新井直樹

月刊地域と人権 442 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 2)

全国水平社創立百周年 部落解放運動100年の歴史 2 丹波正史

法務省「部落差別の実態に関する調査結果」 中島正智 部落問題の現状と解決の課題—若者の視野から 平井雅希

月刊地域と人権 443 (全国地域人権運動総連合刊, 2021. 3)

水平社創立百周年を部落問題解消のゴールに 2 新しい「差別意識」解消は法・条例より、人権を本音で語る地域づくりで 植山光朗

地域と人権京都 828 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 1. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 15 川部昇

地域と人権京都 829 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 1. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 16 川部昇

地域と人権京都 830 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 2. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 17 川部昇

地域と人権京都 831 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 2. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 18 川部昇

地域と人権京都 832 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 3. 1) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 19 川部昇

地域と人権京都 833 (京都地域人権運動連合会刊, 2021. 3. 15) : 150円

戦後京都市の部落解放運動と同和行政の沿革 20 川部昇  
 であい 705 (全国人権教育研究協議会刊, 2020. 12) : 160円

日本の公立学校で働く外国籍教員について～共に子どもたちと向き合うために～ 3 古川正博

人権文化を拓く 277 無自覚な加害性 ちゃんへん.

であい 706 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 1) : 160円

日本の公立学校で働く外国籍教員について～共に子どもたちと向き合うために～ 4 古川正博

人権文化を拓く 278 菊池事件の国民的再審請求 岡田行雄  
 であい 707 (全国人権教育研究協議会刊, 2021. 2) : 160円

日本の公立学校で働く外国籍教員について～共に子どもたちと向き合うために～ 5 古川正博

人権文化を拓く 279 「独りを慎む」から学ぶこと 坂元茂樹

ヒューマンJournal 235 (自由同和会中央本部刊, 2020. 12) : 500円

新しい部落史 5 ケガレと差別 灘本昌久

ヒューマンライツ 394 (部落解放・人権研究所刊, 2021. 1) : 500円

特集 水平社100年とマイノリティの連帯

障害者運動～水平社宣言と障害の社会モデル 尾上浩二  
 女性たちが中心となり、この国のかたちを問う部落解放運動を始めたい 川崎那恵／在日外国人の人権状況の現在—共に生きる社会とは 田中宏／水平社宣言に背中を押されて～父ありてこそ～ 林力

識字運動の担い手たちが語る 1 識字運動を未来につなぐ～連載「識字運動の担い手たちが語る」に寄せて～ 森実

書評 奥田均・高橋典男・土田光子著『暴露と曲解 部落ってどこ?』 組坂繁之

追悼 玉木哲淳君を偲ぶ 寺木伸明

ヒューマンライツ 395 (部落解放・人権研究所刊, 2021. 2) : 500円

特集 新型コロナと人権の法制度

識字運動の担い手たちが語る 2 “生きるために文字を覚える” 梶川田鶴子さん (住吉輪読会・水曜組) 前編 菅原智恵美

部落解放運動のこれから—引き継ぎそして変革へ 13 ムラの偉人と解放運動 中村詠吉

ヒューマンライツ 396 (部落解放・人権研究所刊, 2021. 3) : 500円

特集 3. 11から10年—語れない被害を考える

私たちの暮らしと文化を軸にした社会同和教育の創造 2  
大田区 水野松男  
葛飾支部の軌跡と将来～支部結成から現在～これから  
松島幸洋  
**解放新聞東京版 1000** (解放新聞社東京支局刊, 2021. 3. 15) : 95円  
足立支部の歩み 結成から50年を迎えて 長谷川三郎  
**解放新聞広島県版 2379** (解放新聞社広島支局刊, 2021. 2. 25)  
小森龍邦一『わが闘魂の半生』16  
**解放新聞広島県版 2380** (解放新聞社広島支局刊, 2021. 3. 5)  
小森龍邦一『わが闘魂の半生』17  
**架橋 44** (鳥取市人権情報センター刊, 2021. 2)  
特集 だれひとり取り残さない社会の実現をめざして～持続可能な開発目標 (SDGs) を考える～  
講演録 「在日」と「出会う」 在日として、日本を愛し、生きる 李信恵  
アイヌ民族の文化を伝える紙芝居に込めた思い 河原清夫  
みんなの架橋～架橋でめぐる全国の人権機関～ 三重県人権センター  
**語る・かたる・トーク 310** (横浜国際人権センター刊, 2020. 12) : 550円  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「ここに残りたい」 吉成タダシ  
**語る・かたる・トーク 311** (横浜国際人権センター刊, 2021. 1) : 550円  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「人権作文『本音で話す』」 吉成タダシ  
**語る・かたる・トーク 312** (横浜国際人権センター刊, 2021. 2) : 550円  
語る・かたる・エッセー 中高生とともに差別と闘う  
「レナの本音」 吉成タダシ  
**かわとはきもの 194** (東京都立皮革技術センター台東支所刊, 2020. 12)  
靴の歴史散歩 139 稲川實  
皮革関連統計資料  
**グローブ 104** (世界人権問題研究センター刊, 2021. 1)  
「部落地名総鑑」と情報通信技術 稲野明英  
「ダメ！」より「なぜ？」を考える～人権感覚を磨くために～ (誌上ワークショップ) 渡辺毅  
**芸備近現代史研究 5** (芸備近現代史研究会刊, 2021. 1)  
明治4年福山県農民一揆の素描—変革期における人民の動き— 佐藤一夫  
森近運平による社会主義伝道行商支援—大逆事件にまき

こまれた備中高屋の農業技師— 田中英夫  
堀川俊市と山本宣治との出会いについて—1925年の歴史的瞬間を探る— 今岡順二  
写真に見る近現代史 3 社会運動家 高津正道 編集委員会  
覚え書き・1979年以降の広島県同和教育運動—歴史修正主義と文部省「是正指導」、新自由主義的政策— 香渡清則  
本の紹介 城間和行著作集『魂輝』(2020年) 割石忠典  
**国際人権ひろば 155** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2021. 1) : 350円  
特集 「ビジネスと人権」のいま  
**国際人権ひろば 156** (アジア・太平洋人権情報センター刊, 2021. 3) : 350円  
特集 アウティング—「暴露」「さらし」を考える  
**人権と部落問題 943** (部落問題研究所刊, 2021. 1) : 600円  
特集 コロナ禍—命と向き合う現場  
異議あり ウポポイ 禍根のこす、権利の視点欠く日本型先住民族“管理” 松元保昭  
文芸の散歩道 菊池寛の戯曲「海の勇者」の改作批判 (続篇) —部落問題関係作品から個人差別問題への変質— 桑原律  
ごった煮人生をふり返って 30 高校教員時代の部落問題関係の仕事 成澤榮壽  
**人権と部落問題 944** (部落問題研究所刊, 2021. 2) : 600円  
特集 在日コリアンと人権  
「部落差別の実態に係る調査」研究報告書の検討 梅田修  
文芸の散歩道 ドナルド・キーン「破戒」評 福地秀雄  
**人権と部落問題 945** (部落問題研究所刊, 2021. 3) : 600円  
特集 「3. 11」10年目の現実  
文芸の散歩道 浅井了意の卑賤観—『浮世物語』より— 小原亨  
2020年度『人権と部落問題』総目次 (934号～945号)  
季刊人権問題 402 (兵庫人権問題研究所刊, 2021. 1) : 700円  
全国水平社創立100周年を意義あるものに 前田泰義  
**振興会通信 156** (同和教育振興会刊, 2021. 1)  
同朋運動史の窓 62 左右田昌幸  
**信州農村開発史研究所報 153・154号** (信州農村開発史研究所刊, 2020. 12)  
川向秀武前所長・元理事長を悼む 斎藤洋一  
小諸藩領の被差別民の「旦那寺」 斎藤洋一  
**崇仁～ひと・まち・れきし～ 11** (崇仁発信実行委員

# 収集逐次刊行物目次 (2021年1月～3月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**愛生 828号** (長島愛生園刊, 2020.12)

長島愛生園開園90周年記念号

**アイユ 356** (人権教育啓発推進センター刊, 2021.1) : 205円

部落差別と結婚差別 1 「Kakekomi寺…結婚差別」ネットワークの取組 1 大賀喜子

**アイユ 357** (人権教育啓発推進センター刊, 2021.2)

部落差別と結婚差別 2 「Kakekomi寺…結婚差別」ネットワークの取組 2 大賀喜子

**朝田教育財団だより 34** (朝田教育財団刊, 2021.1)

崇仁学区の現状と部落差別～国勢調査から～ 森本弘義

**鷹陵史学 46** (鷹陵史学会刊, 2020.9)

京都市西部地域における都市化の進行と在日朝鮮人 高野昭雄

**解放新聞 2976** (解放新聞社刊, 2021.1.5) : 115円

全国水平社創立100周年に向けて 3—100年前の1921年はどんな年? 駒井忠之

**解放新聞 2977** (解放新聞社刊, 2021.1.15) : 115円

先住民族アイヌの文化復興の拠点 ウポポイ紹介 竹内渉

**解放新聞 2978** (解放新聞社刊, 2021.1.25) : 115円

埼玉部落史研究会が発足 三つの現場をつなぎ、次世代に継承を一部落解放運動、同和教育運動、部落史研究— 吉田勉

**解放新聞 2979** (解放新聞社刊, 2021.2.5) : 115円

本の紹介 松島泰勝・山内小夜子編著『京大よ、還せ 琉球人遺骨は訴える』 川瀬俊治

**解放新聞 2980** (解放新聞社刊, 2021.2.10) : 180円

2021年度(第78期)一般運動方針(第1次草案)

**解放新聞 2983** (解放新聞社刊, 2021.3.5) : 115円

本の紹介 中山武敏著『人間に光あれ 差別なき社会をめざして』 岸本萌

**解放新聞 2984** (解放新聞社刊, 2021.3) : 115円

『朝鮮衡平運動史料集・続』 衡平運動の全体像解明へ—史料集続編が刊行 割石忠典

本の紹介 中山武敏著『人間に光あれ 差別なき社会をめざして』 兵庫県連青年部

**解放新聞京都版 1200** (解放新聞社京都支局刊, 2021.2.1) : 70円

この人の架け橋 1 土田大介さん

**解放新聞京都版 1201** (解放新聞社京都支局刊, 2021.2.15) : 70円

この人の架け橋 2 土田大介さん

**解放新聞東京版 995・996** (解放新聞社東京支局刊, 2021.1.1・15) : 190円

生革と甲冑 皮革職人の自信と誇りを考える 水野松男

**解放新聞東京版 997** (解放新聞社東京支局刊, 2021.2.1) : 95円

と畜からはじまる暮らしと文化 1 コラーゲン(膠・ゼラチン) 水野松男

私と墨田支部女性部 起ちあがった女性たちに導かれて 北川京子

**解放新聞東京版 998** (解放新聞社東京支局刊, 2021.2.15) : 95円

と畜からはじまる暮らしと文化 2 骨粉・油脂 水野松男  
荒川支部結成から50年の歩みを振り返って～闘いを受け継ぎ「人権と福祉のまちづくり」を～ 小野崎篤

**解放新聞東京版 999** (解放新聞社東京支局刊, 2021.3.1) : 95円

## 事務局よりお知らせ

◇今年度の「差別の歴史を考える連続講座」のお知らせを掲載しましたが(第6回目は開催予定ですが講師等は未定です)、新型コロナウイルス感染症の流行状況によっては連続講座の日程変更もしくは中止の場合があります。お手数ですが、参加ご希望の方は必ず連絡先を明記の上、メール・FAXにてご連絡ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032 □E-mail qm8m-ndmt@asahi-net.or.jp

□URL <http://shiryo.suishinkyokai.jp>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・木曜(月2回)・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩5分